

会員の広場



## 杉浦 強先生 と <浦の会>

鶴巻 雄三郎

私が杉浦 強（つとむ）先生を知ったのは、平成 9 年（1997 年）のことであった。そのきっかけは、上智大学コミュニティ・カレッジの講座「人間学——人間の再考」であった。講義は、西行、良寛、芭蕉などの、日本人の宗教心と生き様を講義された。講義の後、上智大学の近くの中華料理店「来々軒」で二次会が催されるのが常であった。その会場で、杉浦先生が個人的に講義をしてくださる<浦の会>があるのを知り、入会させていただくことができた。

<浦の会>は、上述の「人間学——人間の再考」講座の受講生有志などが集まって、1995 年に杉浦先生を中心に作られた学習会で、名前は杉浦先生の「浦」に因んで<浦の会>と称した。<浦の会>は月 1 回、土曜の夜に深川の芭蕉記念館で開催された。この会は、芭蕉をもっと深く学び、学んだ後、その会場に一品を持ち寄り、二次会を行うのが慣例であった。

また、杉浦先生の講義の前に、毎回一人ずつ、自分が関心のあるテーマについて簡単な発表を行うことが途中から付加された。

また<浦の会>の会誌『衆』（全 17 号、1996–2005 年）が年 2 回発行されたし、芭蕉や良寛の足跡を訪ねて、日光、松島、平泉、出羽三山、山寺、出雲崎、山中温泉、大垣など「奥の細道」を辿る旅行を自主的に行ったりもした。会員は多士済々で、まれに見る傑出した学習会であった。

杉浦先生は、『衆』第 10 号（2000 年 7 月、104 頁）の自己紹介欄に、「負け犬の論理」という、次のことを書かれている。

人生の途上で軽くいなして逃避するようなドライアイスの昇華現象の生き方を、私は好まない。実存という個の哀愁を、自己のものとして究極まで味わい尽す液化状態に親しみがわく。だから食物がエネルギーに変化するような自己の過程を踏む消化現象が好きだ。石仏の貌に、ハンセン病の兄弟に、下積の使徒の姿に、隠れた諸實在に、私の眼は向く、負け犬と呼ばれる論理かも知れない。だが人間キリストの真の姿は、負け犬そのものであった。だからこそ、栄光の復活まで気化し得たのではないだろうか。そして平成 12 年のいまも、この負け犬の論理への追従は少しも変わっていない。

杉浦先生は『カトリック新聞』俳壇の選者であり、上智大学の人間学の講師であり、比較宗教研究者であつたりする以前に、孤独な詩人であった。

浦の会での講義は、前にも述べたように、芭蕉・良寛・西行の作品を宗教学的に深く読む視点から解説が行われた。杉浦先生のテーマは、「日本宗教の根底にあるもの」を比較宗教的観点から追究することであった。

杉浦先生の作品『幻想詩集 マリア観音』（中央出版社、1980 年）に、次のような指摘がある。少し長いが引用しておきたい。

現代の日本人は東西の文化遺産を高度に受け入れ、伝統ある民俗的な性格は消えていったように思われる。しかし、この外的な姿をすなおに歴史的変遷として承認してよいものか甚だ疑問である。私は日本人の心のもち味は消えかかることはあっても本性的にいつの時代にも不変であるという。ひとつの命題として与えられる霊能（カリスマ）を痛切に感ずるのである。

観音のもつ静かな言葉に表象されぬ余情をもつ霊性は仏教伝来以前に祖先が本性的に把握していたものであろう。この事実は外来の禅宗の論理が文字以前の純粹形而上学的要素をもっていた日本の民俗的本性に触れて調和したために受け入れられる結果となったのと同型である。（中略）

日本人は自然と共に成長したために、まったく自然性のうちに溶け込み切り放すことができなくなり、そのために超自然の理念と自然主義の圏内に終止する日本文化との相剋のない一致を生み出したのであろうと思う。

と述べられている。

浦の会の受講生は、杉浦先生が行う比較宗教学的アプローチによって、芭蕉と「聖書」やキリスト教とを結びつけて考察することに最初はしきりに戸惑った、しかしだんだんと、「言われることが本当かも知れない」と思えるようになってきた。芭蕉自身の「真意」がどうであったかは、杉浦先生御自身も「わからない。芭蕉がびっくりしているかも知れない」とおっしゃる。そういうわれても、受講生一同にとっては、大いに耳を傾ける価値がある講義であった。

また、＜浦の会＞の会誌『衆』も学習会の特色の一つであった。この『衆』には、最低限守るべきルールが定められていた。編集者 I 氏は神田の出版社の社長であり、彼の編集方針は、①人間学に関するもの、②芭蕉・良寛・西行などに関するもの、③宗教に関するもの、に限定してエッセイや論文を掲載した。私も投稿したが何回か掲載を断われたことがある。なお、『衆』は国会図書館（請求記号：Z71-D356：タイトル：衆・浦の会会誌）に所蔵されている。

杉浦先生はいつも「浦の会はすごいよ。アカデミックで大学院レベルだよ」とおっしゃっていた。浦の会の講義の後に会員の間で交わされる会話は、ちょうど大学院のゼミに似ているように思われた。

一方、杉浦先生は、＜浦の会＞の円熟した人たちに囲まれて「宴と孤心」（大岡信）を心底味わっておられたように思う。少し酒を飲まれて、いわば陶酔状態の中でゆっくりと芭蕉の世界に下降してゆき、芭蕉の気持ちになりきることで、芭蕉が語らなかったこと、また語れなかったことの扉を開けられるのである。深川の芭蕉記念館の夜は更けていく。

(追記：杉浦 強先生は平成17年1月9日に帰天されました。)

---

**鶴巻 雄三郎** (つるまき・ゆうざぶろう)

1933年新潟県三条市生まれ。放送大学卒業。同大学大学院文化科学研究科修士課程修了。郵政省を経て日本航空に勤める。専門学校非常勤講師。紀尾井生涯学習研究会、四谷会、歴史学研究会、絵巻購読会、歴博友の会等に属して、日本の古代史を中心に研究交流をする。「<風>を生きた芭蕉」『衆』第10号、2000年7月、34-41頁；「古代東国における交通路の特質について——板東の東海道・東山道利用の実態」『生涯学習フォーラム』第6巻第2号、2003年3月、1-33頁。